

第二回文学講座『誌要』掲載に向けて：第二回文学講座《戦後文学への問い》

著者	日本文学科学学生委員会
雑誌名	日本文學誌要
ページ	3-5
発行年	1974-09-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019250

《戦後文学への問い》

第二回文学講座『誌要』掲載に向けて

日本文学科学会

《戦後文学への問い》というテーマは、《現代》への問い、ということも意味し、むしろその点から発せられた言葉であった。《現代》。私達は、この軟体怪物の前で立ち尽してしまう。本来、人間を大きくするはずであった科学は、人間をアリののようにちっぽけにしてしまった。あの人間の予想規模をはるかに越えた破壊の存在、核兵器を何とみよう。マスコミという怪物は、存在、関係から実体を取り上げ、世界は、記号化され、また、抽象化されてゆく。実体を亡くした言葉は幽霊となって巷に浮游する。ノーマン・メイラーが、これからの文学の領域は、性であると言ったのを思い出す。そして、暴力か、焦躁を感じながら立ち尽す私達の姿は、人間の、人間と世界との関係のアイデンティティを確保しようとあせっている。私達はイメージの作り出した世界に住んでいるのだ。マルクスの次の言葉を記しておく「私はマルクス主義者ではない」。なんと根底的な言葉ではないか。みんな餓えている。《私達の現代》とは、私達のすべての関係が疎外化を潜在させている構造を作っていることだ、と思う。

私達は、こう意識する時代にあって、現代とは何か、文学とは何か、を根底的に問おうと試みたのである。その目は、戦後文学へと向けられた。現在の文学を引き出して来た直接的原点であろう戦後、戦後文学を検討的、

批判（批評）的に見てゆくことは、現在をより手許で意識化するために意義あることだと思うからである。その意味で「もはや戦後文学は古い。それに私達は、その戦争というものを知らない子供達ではないか。」という意見には反対したい。戦後へ帰ろうとするのではない。戦後文学を私達の目で見ること、現在の問題の根底は何なのかを問おうとすることなのだ。戦後の方向の行詰りを現実的に露わにしている現在こそ、その原点を問わねばならないだろう。それは明日に向けての可能性を探ることも意味している。

例えば、戦後文学、「近代文学」派の問うたものは、コミュニズムという問題と個の主体化という問題であつたろう。自己とは一体何なのかを深く問い、人間実存の自由、主体を獲得しようとしたのであった。それは、エゴを自覚することでもあつたろう。正に、主体を獲得するためのコミュニズムであるが、その政治的理想と個の理想との両方を平等に捨てず進もうとした。これは、世界の現実において、生と存在、個の実存と世界との関係における分裂を問い、人間のアイデンティティを求めようとしたものであつたろうと思う。そして現在、冒頭に述べたことを考え合わすとき、私達は、「近代文学」派の問うたものをより複雑な形において持っているのではないだろうか。その本質的問題性は新しい顔をして私達の前にあるのではないだろうか（戦後文学への問い）という必要を、正に現在こそ感じるのである。

私達は、「問う」ということを重視した。私達の企画は、いかに、より確実と思われる解答を得るか、ということ欲しなかった。現在のようにあまりにも分散化した方法とテーマの中で、結局、狭く概念的な形で戦後文学を処理してしまうというような無駄な講座にはしたくなかったからである。そのためにも、ひとつの解答を出すのと、構成内容を狭くまとめようとはしなかった。私達の目は、根底的に「見る」試みから、前述した視点に立って、現在における日常を異常化し、意識化する処を見ていたのである。また、日常という形で流されやすいものを、意識化するという訓練でもあるわけである。正に、オリに囲まれた現在の法政大学の異常さを、平静な大学という言葉に隠されてしまわないために、でもある。つまり、私達の基本的な方法姿勢は、「よく見る」ということであつた。そして、講演者諸氏は、私達の予想通り、さらにはそれを越えて、私達の未熟な問題意識に、多くの刺激と示唆を発するという応え方をして下さった。ここで内容そのものを紹介することは出来ないのだから、それぞれの問題意識で読まれることを期待する。

以上、当講座における私達主催者側の問題意識と方法意識を書いてきたわけである。さて、私達のこういう企画が、活字化され、聴講者のみならず、広く多くの人に読まれることは、二重に講座の意味を深め、さらに、学生委員会再建、充実に向けてきた当講座が、国文学会再建への第一歩としての『誌要臨刊号』に特集掲載されたことは、その意味を三重に深めるものであると思う。私達は、これからも国文学会と積極的に関係し、積極的に批判もしてゆくつもりであることをこの誌上で記しおきたいと思う。

最後に、「第二回文学講座」が、多くの読者によって批判的に検討され、私達の運動がより深められることを希望する。私達の発した問いが、少しでも輪を広め共同の問題意識化されてゆくなら、望むところである。そして、そういう運動化の中から「第三回文学講座」が創られてゆくだろうと思う。文学という書くことで、認識しようとする、意識化、異常化しようとする行為は、〈現代〉にあって、人間を世界を問うてゆくだろう。そしてそれは根底的であらねばならない。私達は、文学が現代という地点に立って、非「政治と文学概念」という、文学的文学の場所で、異議申し立て行為をしてゆくだろうと思っている。(S・49・8・15・北条博幸)